ＬＰレコードを愛して５０数年

最近、近所の BOOK OFF にＬＰレコードのコーナーが出来ていました。

どんなＬＰがあるか覗くと、あるある昔の名盤が。「え、これが１００円！１０枚買っても１０００円。」それも帯付きで新品のような物もある。その中に［マーラーの交響曲４番、バーンステイン指揮ニューヨーク・フィル］があった。実はこのＬＰは、高校生の時、町のレコード店で買ったのと同じです。当時、確かマーラーの１番「巨人」を買おうと思って行ったのだが、なかったので代わりに買いました。

さっそく家に帰り、買ったＬＰに針を落としました。なんとレコード盤に傷一つありません。ＬＰ独特の高音にのびがある良い音がしました。その頃にタイムスリップしたような気がしました。40 年以上前のレコードプレイヤー（ダイレクトドライブ）ですが、まだまだ動きます。断捨離どころか、我が家のＬＰレコードは増え続けています。

今の時代はスマホなどデジタル音源で音楽を聞くことが多いようですが（私も聴きますが）ＬＰが生の音に一番近く、人気が出ています。私も時々、仕舞い込んだ箱からＬＰを出しては聴いています。

さてバーンステインは 1960 年マーラー生誕 100 年の年に、まず４番を録音したのです。彼は 1967 年に１から９番までの録音を、世界で最初に終えました。マーラーの交響曲ステレオＬＰの発売です。でもマーラーは演奏時間が長く２枚組ＬＰで 4000 円もしました。当時は興味ある曲を聴く方法は、高価なＬＰレコードを買うか、ＮＨＫーＦＭ放送、教育テレビＮ響アワーなどを聴くしかありませんでした。

1970 年代からステレオセットが出回り、ステレオＬＰレコードが続々と出ました。千円盤とよばれる廉価版も普及し、ＬＰレコードはますます勢いを増しました。

また、カラヤン指揮のベルリンフィルは次々と新録音を出していきました。カラヤンは「楽壇の帝王」とまで称されました。私もベートーヴェンの第９と８番の２枚組（初版ＬＰカートンボックス）など沢山買いました。ベートーヴェンの交響曲はカラヤン・ベルリンフィルが、重厚な響きで大好きでした。1970 年はベートーヴェン生誕 200 年で、映画館ではカラヤンの指揮による演奏が上映され、彼の人気は凄かったです。

1971 年に映画「ベニスに死す」が公開され、見に行きました。今回の演奏会の、５番４楽章「アダージェット」が全編を通じて使われ、注目を浴びました。映画では主人公を作曲家にしてあり（原作は作家）、マーラーの名が広く世界に知られるようになりました。

また、このころから多くの日本のオーケストラもマーラーを演奏するようになりました。海外のオーケストラも来日してはマーラーを取り上げ、演奏会はすべて大盛況でした。1990 年に来日したシノポリ（フィルハーモニア）は、16 日間で 10 回の演奏会でマーラーを全曲演奏しました。指揮者エリアフ・インバルは何度も来日し、マーラーを振りました。彼は 2001 年 11 月この奈良国際ホールで「巨人」を指揮し、私も聴きに行きました。超満員でした。彼は「マーラーは交響曲に於いてベートーヴェンより革新的で優れている。」とも言っています。

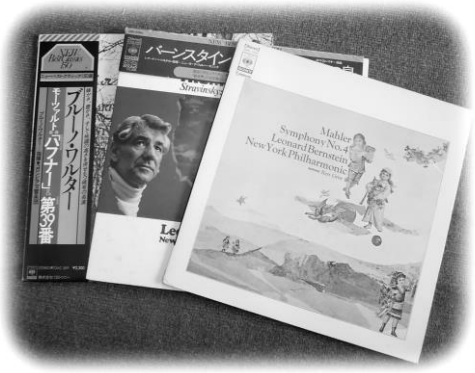
ところで、アマチュアオーケストラにとってマーラーを演奏するとは、いったいどういうことでしょうか。私たち奈良響も過去に１番と４番は演奏しましたが、60 分を超えるマーラーの大曲を演奏するのは、今回が初めてです。やはり大変な難曲だということです。この曲を演奏することは一流アマオケへの登竜門なのです。チェロのパート譜は、なんと 43 ページです。譜読み（リズム、音程、指のポジション、弓のボーイングなど）に半年以上かかりました。今までに経験した最長のベートーヴェン第９より長く複雑です。この演奏会で５楽章最後まで体力がもつかどうかが心配です。（聴衆のみなさんも長時間大変でしょうが、、、、、４楽章で寝ないで下さいね）

来年古希を迎えるチェロ弾きじいさんにとって、これが最後のマーラーになるかも。

次の頁に、マーラーとベートーヴェンを表にまとめました。二人の作曲家は類似点も不思議と多いような気がしました。実はマーラーは何度もベートーヴェンの第９を編曲し指揮したそうです。ベートーヴェンの交響曲を研究していたのですね。

マーラーもベートーヴェンも多くの苦難を乗り越えて沢山の名曲を残しました。
だからこそ、私たちに今も感動を、生きる希望をあたえてくれるのでしょう。

マーラーとベートーヴェンをＬＰで聴くのが大好きなチェロ弾きじいさんより



マーラーとベートーヴェン

	マーラー	ベートーヴェン
9つの交響曲	9曲。長い。革新的。合唱入りもある。5番は管弦楽のみで歓喜でおわる。	
	2番「復活」はベートーヴェンの第9を超える独唱と合唱団。第3番、8番も、歌入りでとにかく長い。しかし5番はやはりベートーヴェンを意識したのか合唱はなく、しかも始まりはなんとベートーヴェンの5番と同じタタタターン。最終楽章は長調の勝利で終わる。	3番は50分越え。ハイドンの2曲分。第9は何と交響曲史上初めての合唱入りで、1時間越え。ベートーヴェン以降の作曲家は彼に倣い5番目の交響曲を作るときには特に力を入れた。チャイコフスキー、ショスタコービッチ、そしてマーラーも。
41歳で大恋愛、しかし	5番4楽章は愛するアルマへのラブレター	3通の不滅の恋人への手紙（ラブレター）
	40歳まで仕事（指揮と作曲）に熱中人生。しかし1901年41歳の時19歳下の年若き美女に恋をしわずか4ヶ月でアルマと結婚。2人とも初婚でした。マーラーは 愛する人への思いを胸に、作曲途中だった交響曲第5番に急きょ、第4楽章「アダージェット」を加えることにしたのでした。この楽章は愛するアルマへのラブレターなのです。しかし結婚後、妻に亡き母親を重ね妻を拘束。妻の心は次第に離れていき、アルマは不倫に走るようになります。	ベートーベンの死の翌日、遺品の中から手紙が3通発見された。3通目の初め「おはようベッドのなかからすでにあなたへの思いが募る、わが不滅の恋人よ、運命が私たちの願いをかなえてくれるのを待ちながら、私は喜びに満たされたり、また悲しみに沈んだりしています。」まだまだ続きますが、相手の女性は4人の子持ちの人妻。手紙は渡せなかったか。返されたのか。41才の恋は悲恋におわり、ベートーヴェンは数年間スランプに陥る。
不幸な家庭環境	少年時代のマーラー一家は、勉学熱心だが分裂気質で暴君のように振る舞った父親のもと、夫に暴力を振るわれるままであった母親、幼くして死んでいった弟達など、かなり凄惨な家庭だったと言われています。結婚後も長女マリア・アンナをジフテリアで亡くしています。	父親は第二のモーツァルトにするべくピアノ演奏を厳しく教え込む。16歳で母親、22歳で父親を亡くしベートーベンが一家の家計を担う。晩年、弟が急死し甥カールの後見人となり息子のように世話をするがカールはいやがりピストル自殺未遂事件をおこす。
苦しんだ病気	マーラーの弟子で指揮者のブルーノ・ワルターは「彼は分裂症で躁うつ患者のようだ。」と言っている。50歳で精神分析医フロイトの診断をうけ脅迫神経症と診断される。（妻が夜中、横にいるか確認するため不眠となる。）	ハイリゲンシュタットの遺書を書いた31歳の時にほとんど耳が聞こえない状態だった。慢性下痢は死ぬまで続いた。（いずれも原因不明）晩年は肝硬変を患い、ワインの防腐剤による鉛中毒の症状もあった。
差別された環境	マーラーは、ユダヤ人の家に生まれる。37歳でウィーン国立歌劇場の総監督に就任するが反ユダヤ主義の市長により「ゲルマン文化の冒涜者」として解任される。ユダヤ教からキリスト教に改宗してもである。マーラーは言っています。「私は世界中どこへ行っても侵入者で歓迎してくれる所はありません」と。	平民出身のベートーヴェンは差別のない社会を求めており、危険思想の持ち主として当局にマークされていた。ベートーヴェンは知人への手紙で、“自分の思想を大声で話せない。そんなことをすれば、たちまち警察に拘留されてしまう”と憂いた。葬儀の折、宮廷からは一輪の花も、1人の弔問もなかった。

第10交響曲は二人とも未完成で終わったが、いろんな苦しみの人生の中から誕生した二人の交響曲は、現在オーケストラの演奏会の主要な曲になっている。ある指揮者は「この二人の交響曲がなかったらプロのオーケストラの経営はなりたたないでしょう。」とも言っています。